

○参同契 さんどうかい

竺土大仙の心 ちくどだいせん しん 東西密に相附す。 とうざいみつ あいふ 人根に利鈍あり にんこん りどん 道に南北の祖 どう とう

なし。 靈源明に皓潔たり れいげんみょう こうけつ 支派暗に流注す。 しはあん るちゆう 事を執するも元 じ しゆう もと

これ迷い 理に契うも亦悟りにあらず。 り かの また 門門一切の境 もんもんいつさい きよう 回互と えご

不回互と 回してさらに相渉る。 ふえご え あいわた しからざれば位によって住す。 くらい じゆう

色もと質像を殊にし しき しつぞう こと 声もと楽苦を異にす。 しやう らつく こと

暗は上中の言に合ひ、明は清濁の句を分つ。

四大の性おのずから復す、子の其の母を得るがごとし。

火は熱し、風は動揺、水は湿い、地は堅固、眼は色耳は音声。

鼻は香舌は鹹酢。しかも一一の法において、根によって葉分布す。

本末すべからく、宗に帰すべし、尊卑其の語を用ゆ。

明中に當つて暗あり、暗相をもって遇うことなかれ。

暗中に當つて明あり、明相をもって覩ることなかれ。

明暗おのおの相對して、比するに前後の歩みのごとし。

万物おのずから功あり 当に用と処を言うべし。

事存すれば函蓋合し 理応ずれば箭鋒さそう。

言を承てはすべからく宗を会すべし。みずから規矩を立すること

なかれ。触目道を会せずんば 足を運ぶもいづくんぞ路を知ら

ん。歩みをすすむれば近遠にあらず 迷うて山河の固をへだつ。

謹んで参玄の人にもうす光陰虚しく度ることなかれ。

ほつぎやうごんまい

## ○宝鏡三昧

如是によぜの法ほう 仏祖密ぶつそみつに府ふす。汝なんじいまこれを得たり よろしくよく保護ほうご

すべし。銀椀ぎんわんに雪を盛り 明月めいげつに鷺ろを蔵かくす。類るいして齊ひとしからず 混こん

ずるときんば処ところを知る。意言こころごとにあらざれば 来機らいきまたおもむ

く。動どうずれば窠白かきゆうをなし たがえば顧佇こちよに落つ。背触はいそくともに非ひなり

大火聚だいかじゆのごとし。ただ文彩もんさいにあらわせば すなわち染汚ぜんなに属ぞくす。

夜半正明やはんしょうめい 天晓不露てんぎようふうろ。物もののために則のりとなる、用もちいて諸苦しよくを抜ぬく。

有為うゐにあらずといえども、これ語ことばなきにあらず。宝鏡ほうきやうにのぞんで

形影ぎやうやうあい観みるがごとし。汝なんじこれ渠かれにあらず、渠かれまさにこれ汝なんじ。世よの

嬰兒ようゐの五相ごそう完具がんぐするがごとし。不去ふこ不来ふらい、不起ふき不住ふじゆ。

婆婆ばば和わ、有句うくむく無句むく。ついものに物ものを得えず、語未ごいまだ正ただしからざるがゆえに。

重離じゆうりり六爻りつこう、偏正へんしやう回互えご。置たたんで三さんさんとなり、変へんじ尽つきて五ごとなる。

莖草ちそうの味あじわいのごとく、金剛こんごうの杵ちよのごとし。正しやう中ちゆう妙みやう挟きやう

敲唱こつしやう双なごびあぐ。宗しゆうに通つうじ途とに通つうず、挟きやう帯たい挟きやう路ろう。錯然しゃくねんなるとき

んば吉きつなり、犯忤ぼんごすべからず。天真てんしんにして妙みやうなり、迷悟めいごに属ぞくせず。

因縁時節いんねんじせつ。寂然じゃくねんとして照著しょうちよす。細さいには無間むけんに入り大だいには方所ほうじよを

絶ぜつす。毫忽ごうこつのたがい律呂りつりよに応おうぜず。いま頓漸とんぜんあり宗趣しゅうしゆを立りつす

るによつて宗趣しゅうしゆわかるすなわちこれ規矩きくなり。宗通しゅうつうじ趣極しゆきわまる

も真常流注しんじようるちゆう 外寂ほかじゃくに内揺うちうごくは繋つなげる駒こま 伏ふくせる鼠ねずみ。

先聖せんしやうこれを悲かなしんで法ほうの檀度だんどとなる。その顛倒てんどうに随したがつて縊しを

もつて素そとなす。顛倒てんどう想滅そうめつすれば肯心こうしんみずから許ゆるす。古轍こてつにかな

わんと要ようせば請こう前古ぜんこを觀かんぜよ。仏道ぶつどうを成じやうずるになんなんとして

十劫樹を觀ず。虎の欠けたるがごとく馬の鼻のごとし。下劣ある  
をもつて宝几珍御。驚異あるをもつて狸奴白牯。

羿は巧力をもつて射て百歩に中つ。箭鋒相い値う巧力なんぞあ  
ずからん。木人まさに歌い、石女たつて舞う。情識の到るにあらず、  
むしろ思慮をいれんや。臣は君に奉し、子は父に順ず。順ぜざれ  
ば孝にあらず奉せざれば輔にあらず。潜行密用は愚のごとく魯の  
ごとし。ただよく相続するを主中の主と名づく。